

明トラ analysis (第7回)

明専トランプ 用語研究 (その1)

♠ズッペの謎 (スペードはなぜズッペになった?)

制54 若林 澄治



明トラでは、♠スペードをなぜ、ズッペと呼ぶようになったのか？
今も謎として残っています。

「ズッペ」の用語ができて約70年、解かれなかった謎を大胆にもここに解き明かそうと挑戦してみました。
興味のある方はご一読お願いします。

♥の呼び方は英語のハートからドイツ語の「ヘル」に変化しました。
♦ダイヤ(ダイヤモンド)と♣クラブの呼び方は英語のままです。なのに、♠は英語でもない、ドイツ語の単語かも知れない「ズッペ」と訳の分からない呼ばれ方をしています。

① ♠スペードの呼び名はなぜ、変形されたのか？

② ♠スペードはなぜ、「ズッペ」と呼ばれるようになったのか？
当時の時代背景に基づきながら、暗号を解き明かすように推理してゆきたいと思います。



ズッペ (スペード)

1. ズッペの語源が分からない

明専会報75号(1999年10月)明専トランプ特集の黒木秀一さん(電55)の寄稿文「明専トランプのルール」にある「明トラの用語と語源の例」に、「♠の呼び方…ズッペ(語源不明)」とあります。

♠は、昭和20年(1945年)前後では「スペード」と呼んでいたが、昭和50年(1975年)時点では「ズッペ」と呼ばれるように変化していた、とのこと。そのズッペの語源が分からない、という謎です。

正子 朔先輩(テ22…1947年)の同じ号の明専会報寄稿文「明専トランプ考」には、

「昭和28年(1953年)九州工大第1回卒業生辺り(入学…1949年)ではドイツ語で言うのが嬉しくて、ハートがヘルになり、オドリがタンチェンになった」

と記述されています。この時(1950年頃)一緒に、♠スペードもズッペに変形されたのではないかと推測します。

ドイツ語でカードスートの呼名、

♥ハートはHertz ([Hertz] ヘル)、

♦ダイヤはKaro ([karo] カロ)、

♣クラブはKreuz ([kroYts] クロイツ)、

♠スペードはPik ([pik] ピク)です。このKreuzはハーケンクロイツ (Hakenkreuz: 鉤十字)のクロイツです。

ドイツ語に変換されたスートの呼

び名は♥ヘルだけで、♦ダイヤと♣クラブは英語のままです。そして、ジョーカーはドイツ語のTausen (タンチェン…オドリ)に変形されましたが、Aエースは「点」という意味のスペイン語Punto (ポント)、ポルトガル語Pinta (ピント)(*1)から「ボン」に変換されたのではないかとされています。

*注釈(*1) ポルトガル語のPintaは先端の意味もあり、日本では「1」の意味に使われたそうです。例…ピン(1)からキリ(10)まで。ピン(1)芸人。京都先斗(ポント)町、等。

変形した用語があればしなかった用語もある、ドイツ語に変換したものがあれば英語のまま残したものもある。各用語の変形における規則性はなさそうに見えます。

しかし本当に規則性はないのでしょうか? いろいろな疑問がいっぱい湧いてきます。

正子先輩は、「ドイツ語でスペードの異名はSCHIPPEN(日本語でシャベルの意)で、これから「ズッペン」「ズッペ」となったものであろう」と推測されています。しか

し、SCHIPPENの発音は「[ʃɪpən] (シッペン)」であり、「[SCH]」の発音はドイツ語でも「シッ」と澄んでいて、「ズッ」とは濁らないため、この説には違和感を持ちました。ハートをヘルとドイツ語変換するのなら、スペードも単純にドイツ語変換して「ピク」か「シッペン」にすればよいと思うのですが、そうではなく語源不明の「ズッペ」と変換したのは何か策略的な目論見があつてのことだと考えます。

2. 明トラ用語の符丁

明トラ用語には符丁（隠語）がかなり使われています。

符丁（隠語）は仲間内のみ通用する言葉で、集団内で仲間意識を昂る役割を持たせることと、言葉遊びの性質もあります。ジャズメン仲間や鮎屋でよく使われます。例えば、鮎屋で「しゃり」は飯のことですが、語源は仏教の舍利、火葬して焼け残った人骨に似ているところから来ています。

明トラ用語は、仲間であることの相互承認や、自分たちだけが知る秘密めいた世界観を作り出すために、

遊び心で面白おかしく言い回しの調子がよい符丁に変換したのだろうと思います。

明トラでその代表は、タンチェンです。ジョーカーはドイツ語へ直接変換されていません（ジョーカーはドイツ語でもJOKERです）。プレイでジョーカーを出せば対面は嬉しくて踊りださんばかりになります。私の学生時代（1980年頃）には「さあ、踊ってみろ」、どうだと言いながらカードを出しました。その「オドリ」がドイツ語の「タンチェン」に変形しました。遊び心のある2段変換の符丁です。ジョーカー→オドリ→タンチェン。明トラ部外者でこれをジョーカーと分かる人はまずいないでしょう。



最後の晩餐後に明トラに熱中、裏切り者は誰だ！

このように符丁は、自分たちが気の置けない仲間同士であることを感じさせてくれ、安心して心を開き遊び惚けられる心地よい場と時間を作ってくれます。

こんな符丁の変換に明トラ用語の規則性はあるのでしょうか？

3. 明トラ用語の謎を解く

【規則性その1】

まず、明トラで符丁化された用語について、規則性を見つけてゆきたいと思います。

重要度の高いカードは、いじられて符丁（隠語）化されています。タンチェン（オールマイティ）、A…ポン（Maxカード）、K…ゴング（ハイカード）、♥…ヘル（最強スーツ）。重要度の高いカードのため、プレイの場において口頭で言い交わされる頻度が高く、口調の良い仲間内だけが分かる表現（符丁）に変形されていったのだと推測します。

そのため、重要度の高くないカードは英語そのままにしていじっていません。Q…クイーン、J…ジャック、♦…ダイヤ、♣…クラブは、省略はありますがそのままの英語です。

従って、一番弱いスーツの♠…スペードもいじらずに英語のままでよさそうです。なのに、♠スペードの用語をいじったのはいったい何故なのか？ 大きな疑問になります。

4. 明トラ用語の謎を解く

【規則性その2】

なぜ♠スペードは変形されたのか？ その謎を解くため、さらに明トラ用語の規則性を探っていきます。強度の最も高いカードは（最強のタンチェンを除いて）いずれのカードも日本語発音で、2音節になっています。♥は3音節の「ハート」から2音節の「ヘル」へ、Aは3音節の「エース」から2音節の「ポン」へ変形されました。

極めつけは、4音節の「ノートラ」が掟破りで、2音節の「トラ」に変形されていることです。「ノートラ」を「トラ」と変形するのは意味が全く逆となり（*2）、ゲームの概念上ご法度だったはずで、正子先輩は「トラ」を「ノートラ」表現へ戻すよう強く訴えています。それを敢えて、「トラ」に変形したのは2音節への統一に拘ったからで、音節数の

規則性を構築しなかったのが見て取れます。同じく4音節の「切り札(きりふだ)」は2音節の「キリ」に省略されました。

つまり、強いカード「Aボン」、「トラ」、「♥ヘル」、「キリ」、「正(セイ)」、「裏(または副)」は勢いのよい2音節です。これは麻雀で、碰(ボン)、吃(チー)、栄(ロン)、ドラなど、アクティブで攻撃的な用語は2音節であることから共通性のあることが分かります。

*注釈へ*2 正式なカード用語では、「トラ」はトランプ(キリ札)の略称です。本来「ノートラ」がキリ札無し、の意味です。

次に強いカード「Kゴング」、「Qクイーン」、「♦ダイヤ」、「♣クラブ」は少しおとなしめの3音節になっています。これは麻雀で、平和(ピンフ)や混全帯公九(チャンタ)など地味な手が3音節であることと共通性があります。ここで、4音節の「Qクイーン」が3音節の「Qクイーン」に変形しています。

「タンチェン」は最強カードのため、もったいぶって4音節にして長めで重厚感、別格の特別感を出して

います。これは麻雀で、満貫(マンガン)、役満(ヤクマン)、ドラドラなど、どうだと言わんばかりの下級の手が4音節であることと共通します。

しかし、♠スペードは一番弱いスツカードなのに4音節でおこがましいと思われたか、弱いカードに4音節を使うのは長くてまどろっこしいと考えられたでしょう。♣クラブ同様の3音節に変形させる必要性がありました。

♠スペードのドイツ語、Pik(ピク)は2音節、Schippen(シッペン)は4音節のため具合が悪い。当時の明トラ使いたちは3音節になるスペードの符丁を探し出そうとしました。

一方、♦ダイヤはドイツ語で「カロ」と2音節、♣クラブはドイツ語で「クロイツ」と4音節のため、日本語音節数の拘りからもドイツ語変換はせず、3音節の英語表現のまま残しました。

5. ♠スツペの謎を解く

ロシアの作家プーシキンが著した

「スペードの女王」(1834年発表)という小説をご存じでしょうか。

ドイツ人の工兵士官ヘルマンが自分の野心を実現するために、伯爵夫人の亡霊と闇取引をした。カードの勝ち札を事前に教えてもらい、借金した大金でカード賭博(ファロ)に挑む。最後の大勝負で♠スペードのAに賭けて大当たりしたはずだった。しかし、ヘルマンは直前に取引の約束を破ってしまい、手元カードは怒った亡霊(伯爵夫人)の顔「スペードの女王(Q♠)」に入れ替わり、全てを失い破滅する。



スペードの女王 (Q♠)

幻想的、ロマン的物語です。これをロシア語でオペラ(歌劇)にしたチャイコフスキー作曲の「スペードの女王(Иликобая дара)」(1890年初演)は名作で、ロシアオペラの代表的レパートリーになっています。

明トラ用語が全般的に符丁へ変形されていたのが1950年頃です。同じころ、映画「スペードの女王」(イギリス制作)が日本で劇場公開されています(1950年6月)。

この名作映画を観たであろう明トラ用語の符丁変換に頭を悩ませていた明トラ使いたちは、この作品に引っかけ、「スペード」を符丁に変換するアイデアを思い描いたはずですが

この作品名に関連するような、皆知っている著名人の名前を符丁にする2段変換の遊び心あるアイデアではどうか。(♠スペード)→(スペードの名のついた作品名)→(その作品の作者名)→「スペードの符丁」です。プーシキンやチャイコフスキーはロシア人でドイツ関わりが薄く、音節が3音節を超えて長過ぎ、スペードの符丁にそぐわない。さて、どうしたものか。

この原作をオペレッタ(喜歌劇)に仕上げた作曲家がいました。オーストリアの作曲家Franz von Suppé(1819-1895)です。Suppéは、オペレッタ(喜歌劇)とその序曲の作曲家として有名で、「ウイーン・オペレッタの父」と呼ばれています。

Suppé 作曲「軽騎兵 序曲」は皆さん、小学校の音楽鑑賞の授業で聴かれたことがあるでしょう。黒沢明「影武者」の映画挿入曲や、ディズニーアニメ「ミッキーのオーケストラ」(1942年公開)に使われてご存じの方も多いと思います。Suppé は、オペレッタ(喜歌劇)「スペードの女王(Pique Dame)」(1864年初演)をドイツ語の台本で作曲しました。

そして、ショルティ指揮、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団演奏、1951年録音の「スペードの女王 序曲」が日本にも紹介され、符丁探索に悩んでいた明トラ使用たちのアイデアにピタリとはまりました。

Suppé は、英語読みでは「スツペ」ですが、ドイツ語の発音では「ズッペ」[zuˈpeː, ˈzʊpe]です。日本では一般に「スツペ」と表記されますが、「ズッペ」の表記もあります。明トラ使用たちは当然、ドイツ語読みの「ズッペ」に着目したはずです。

つまり、オペレッタ「スペードの女王」の作曲家ズッペの名前から、

4音節の♠スペードを3音節の「ズッペ」という呼び名への変形です。

「♠スペード」↓「スペード」の名のついた作品名↓「その作曲者名」つながりの2段変換で、ドイツ語名作曲家「ズッペ」の符丁に変形したのです。

ここに、長く不明であった「♠ズッペの謎」が解けました。

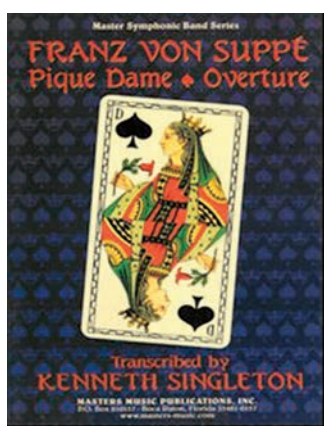
【参考資料】

【資料1】楽譜(表紙1864年)

Franz von Suppé 作曲

(Pique Dame Overture)

「スペードの女王 序曲」楽譜(表紙)



Suppé “スペードの女王 序曲”楽譜

【資料2】音源(1951年 録音)

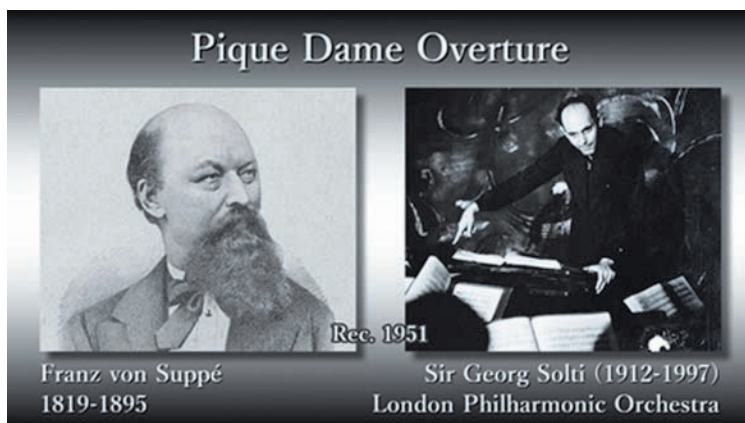
Franz von Suppé 作曲

(Pique Dame Overture)

「スペードの女王 序曲」

サー・ゲオルグ・ショルティ指揮

ロンドンフィルハーモニー管弦楽団
(1951年 録音)



“スペードの女王序曲” ショルティ指揮 LPO レコードジャケット

好き勝手に変形されたようにみえる明トラ用語は、実は規則性に拘って言葉の美学が追求されたものでした。明トラの世界観をオリジナル用語で構築しています。特にズッペは

大きな謎を後世に残しましたが、2段変換で符丁化した「ズッペ」は言葉遊びの極致で、明トラ用語の白眉と言えます。



明トラ用語には後一つ、出どころのよく分からないカードがあります。ゴング(K)です。これも明専会報755号(1999年10月)明専トランプ特集号に、「語源不明」と記されています。いつか、「K(ゴング)の謎」についても解き明かしてゆきたいと思っています。何か情報をお持ちの方はお寄せください。

その時が来たら発表いたします。
(倉敷ふるさと大使、(NPO法人)四谷ブリッジセンター 役員)